

個人的な機械

御殼方式

ただそれだけのことにすぎなかった。御厨良輔（みくりや・りょうすけ）の家にXPがあった。中村助（なかむら・たすく）の家にはそれがなかった。そのためにしばしば彼の家に通った。

今では誰もが個人的に個人的な機械を用いている。しかしまだ当時は誰もが個人的な機械を持つ機会はなかった。時代が充ちる前、それは憧れの品であるか、あまりにも高く上方に登りすぎて見ることさえできなかった。そんな時代のありふれた友人に二人は過ぎなかった。

生き始めてからも十年以上経っていた。二人はまだ無愛想な顔をして小学校に通わなければならなかった。すでにその箱を手狭だと感じる年になっており、時間が経つのを待たなければそこから出ることはできないが、かといって外の世界は分厚いある種の霧の中に浸かっていた。二人はこの点では一致していた。

かつて助は良輔のことを知らなかった。同じように良輔は助のことを知らなかった。助はこの狭い町内の中で別の学校に通う奴がいることを知らなかった。そもそも別の学校があることを知らなかった。良輔はそのことを知ってはいたが、古くからのたこ焼き屋のことさえ知らなかった。そのたこ焼き屋は良輔の家の裏にあった、そこに町内の多くの学生たちの溜まり場になっていたのにもかかわらず。良輔の家に行ったあと二人はそこでしばしばたこ焼きを食べるのが常だった。ソースが苦手な助は何もたこ焼きに加えなかった。良輔はその上に大量のマヨネーズをかけ、怪しい色をしたコーラを傍らに置いた。

二人が出会うきっかけというのも驚くに値しない。家の近くの公園で良輔は黙々とゲームボーイをしていたのだった。彼にとっては余りにも家と近すぎて殆ど庭のようにしか思えない場所だ。助はただいつものように遊ぶ場所を求めてふらついた先がそこだというのに過ぎなかった。初めて助は良輔と会ったのだが、実のところ本人よりも手に持っている個人的な機械にひかれていたのだ。色づいたゲームボーイを助は見たことがなかったのだ。もちろん遊んだこともなかったのだ、彼はそこで少し遊ばせてほしいと声をかけた。良輔は知らない相手と話してはいけないと言われていたが、特に理由はなく自らの判断の下で了承した。二人はその場で友達になった。それから毎日のように良輔と助は公園で会って、話して、遊んだ。

良輔は助を知ろうともしなかったし助は良輔を知ろうともしなかった。それでも友達には友達だった。幾つかの遊びに関わることを、例えば良輔の家にはXPがある、というようなことを除き、さほど二人はお互いのことを知ろうとは思わなかった。つまりこれらのことは念頭に上らなかつた――良輔の家は川から離れた丘の上であり、大きく掃き清められた玄関と最近増築したばかりのガレージがあった。二階に上がる階段からは緩やかな木製の手すりがなだらかに手を差し伸べており、運動をするためだけの部屋があつて、父親がいない間には閉まったままの書斎があった。良輔の部屋には部屋と地球儀と家族でシドニーに行った時のお土産がかかっており、幼稚園の頃から使っている良輔自身も下手だなあとと思う自署の名前が入った聖書があり、助が良輔のお婆ちゃんと信じて疑わなかつたお茶とお茶菓子を出した女性は家族でも何でもなかった。良輔は助に、習っているフルーツをまだ聴かせたくない、と言ったことがある。

それでも助はなんとなく良輔を家には呼びたくないと思つてはいた。無意識化の抑制。助の家、というかアパートの部屋に登る階段は焦げ茶色に錆びていて、それは扉と全く同じ色をしていた。父親はよく昼間から部屋で寝ていて、突然置き上がると不在証明のように家事をするのだった。寝ていた母親は午後になって起きだすと強い視線を作りパーマを尖らせ、夕方になると出勤していった。理由は教えてもらえないが近付いてはいけないと申し渡されている伯父夫妻が助にはいて、祖父と祖母の家がどこにあるのか彼にも分からない。部屋には週刊雑誌とクロスワードと卑猥な本が端っこに乱雑に積み上げられ、父親がいつも買ってきてくれるカップラーメンの器の中から出来合いの味噌汁を啜った。家で何も悪さをしなければ基本的には何も起こらなかつたが、退屈なのは何より問題だった。だから学校から帰るとすぐに荷物を投げ捨てて町の中を駆けずり回ることになっていた。こうしていれば両親の癪癪からも逃れられる。そういうことをしていた矢先に、良輔は助を知つたのだった。

この頃まだパソコンは珍しかった。特に彼らの住む町ではそうだった。だから良輔からXPの事を教えられても助には単なるゲームの入った箱にしか思えなかつたのだ。部分

的に義務教育ではコンピューターの導入が始まっている場所もあったが、まずお目にかかるものではなかった。良輔は子供への悪影響の懸念からテレビに接続するタイプのゲームを買ってもらえず、代わりに買い与えられたのがこのパソコンだった。もちろんスタンドアローン、インターネットという余りにも広大で無秩序な世界に繋がってはいない。それどころか他の実務的な使用を意味付けるようなものは何一つその箱の中に入っていない。それでも二人はこの機械に夢中になった。その中に入っていた、元より据えられていた為に大人の目をくぐり抜けたゲーム、それに二人は夢中になったのだ。

そのゲームは二人の手の中にあっただ色つきのゲームボーイよりも遥かに単純で、既に古典的骨格があったのにもかかわらず、何故それが彼らの心をつかんだのかは分からない。点滅するように回転するカウンターが指す時間の下で、指先が地雷原をクリックし続けた。ブルーライトの明かりを頼りにして、良輔と助は夕暮れに向かってほとんどはしゃぎながら夢中になって遊んだ。ただ人差し指のミリメートルの移動が彼らの情熱をかきたてるとは、既に立体感溢れる画面を、自動車が走ったりゾンビが駆け巡ったり勇者が駆け巡ったりしていた当時にもあまり思いつかないことだったろう。しかしそれは二人には現に現実であり、共通の幻想が、異なった条件の上に眠ろうとする良輔と助の瞼の中に、何度も描かれた。デジタル数字の1と2と3、時にはそれよりもっと多く。僅かな条件の差が、小さな読み違いが、終りを呼び寄せた。取り憑かれた彼らは長くこの遊びに熱中していた。

その間に時間は脆くも通り過ぎた。彼らはいつの間にか手狭な学校をそれぞれに離れ、異なった色をした別の制服を着込みはじめた。助は自転車に乗って山の上に駆け上った。良輔は止まった真っ白なバスに乗り込んだ。その間も彼らは週末には、XPの前に立つと主にメインスイーパーに熱を入れ続けた。二人は学校に通った。一人がいる教室には半ば壊れた椅子と机と暴力的な苛めと無用な行進があった。一人がいる教室には自習室と大きな辞典と英文法の張り紙と陰湿な嫌がらせがあった。それでもまだ彼らは微かな耳に触れるクリック音に耳をすませた。助は柔道部の遥かなる基礎練習の後で、良輔は余りにも長い説教壇からの戒訓の終りに、部屋に立てこもると、地雷原をさまよっては危険部位に大きなXの印をつけた。実力は拮抗していた。僅かな変化がタイムに影響を与えた。例えば助が近所の古馴染みの兄貴から夜の闇に紛れて地区で有名なあばずれの風呂が覗けるポイントを教えてもらった日や、良輔が新しく学ぶ英語の逐語訳に苦勞しながら努力しているのはその教師に認められたいからだという思いに気付いた日も、確かにタイムはたわみ歪んだのだ。そして聞くのだった、何があったのか、と。良輔は答えた。「何もない」。助は答えた。「何もない」。ゲームは続いた。

既に世界は変わっていた。インターネットは未来を約束していた。爆発的な普及には誰も太刀打ちできそうになかった。アメリカとイラクがそれぞれに燃え上がっていた。少年少女が凶悪事件を起こした。それを嬉々としてカメラのレンズが追い、レポーターが声をうわすらせ、卒業文集の文面に一喜一憂しては誰かが謝罪したりしなかったりした。良輔は少しずつスコアを下げていった。その代わりに成績がのび、その程に彼には少しずつ期待という名の張力を内に張り詰めさせた。助は少しずつスコアを上げていった。すでに権力者の息子と喧嘩して以来、学校には近付かなくなっていた。単なる大人数を入れておく鉄の箱に過ぎなかった学校は自身の見映えをよくはしない生徒に何の気も払わなかった。だから電器屋の軒先でスコアを伸ばす時間があつたし、そもそも彼等に目を留める人間など誰もいなかった。時代の来るがままについて保守的な良輔の家族もインターネットの本格的導入を決め、あのXPマシンは彼一人だけのものではなくなり始めていた。だがそれが二人のものでなくなり始めたのはいつの頃からだったのか。

分からなかった。良輔はいつの間にか一人でメインスイーパーに没頭するようになった。だが良輔にはそれが勉強の合間を縫う気晴らしに過ぎず、日々時間を持て余すとそれを遊んでいた助はその実力を遥かに上げ、次に会った時には一ヶ月といっても数か月のぶりに出会うのだったが一瞬数秒の内に画面を空白の海と安全圏のX印の中にはうずめていた。洗われるという概念を失った助の履き古したジャージからは通常を越えた臭いが発して、良輔もそれに気付かずにはいられなかった。あるいはその種の問題に敏感になるに値する年齢となっていた。

助の指先が無地のマウスパッドの上で踊り回る間に、良輔はいままで言わなかった言葉、黙示録級のアルファとオメガ的発言について考えてしまっていた。どうして僕らはこんなところでこんなものをやっているのだろうか？ どんな遊びもこの言葉を発した瞬間に魔法が切れて全ては永遠にがらくたに変わる、奇跡の質問がそれだった。助の動

きが止まっているのがブルーライトの反射の中でわかった。「終わった」と振り返らずに助は言った。「終わった」彼はもう一度言った。良輔はスコアを見た。これまでで最高の、見方によっては究極のスコアかもしれなかった。良輔は負けを認めた。

これで全ては終わったように見えた。良輔は繰り返される模試の中で順次優れた成績を収め、自分の中にある空白の代わりにしようとした。それ以来、助は良輔の家に来ようとはしなかった。会うこともなかった。見かけることもなかった。そもそも接点などなかったんだ、と良輔は思うことにするときもあった。彼には期待を満たせば得られる素晴らしい未来が属しており、そのためには助の存在が誰かには単なる邪魔な存在として写っても過言ではなかった。悪は悪を引き寄せると、母は言った。墮落は墮落を連れてきて家の中に住み着くと、これまでにいたものであるかのように装うのだと。良輔は助を知っていた。そのような悪でもなんでもない彼を。母親の言葉に助が当て嵌まるのかは知らない。もし単に助が悪を帯びているとしても、それは自ら引き寄せたものではない、と彼は確信していた。どこからか時々噂話は染み出てくる。助は早くも小遣い稼ぎの名目で日雇いの職を転々として、仕事の先輩から教えられた酒を未成年にも臆せず出すという場末の酒場や路上に敷かれたブルーシートの上で日々飲んでいるそうだ。良輔は彼がついている日雇いの職業がどのようなものなのか少しも知らず、想像さえつかなかった。飲酒は、特に未成年の飲酒と酩酊は害毒だったが、助の本性は絶対にそのようなものではないと心の底で知ってはいて、それは条件が彼に強いて付随させたものに過ぎない、と思っていた。しかし彼を救う方法は思いつかなかった。

二人が生き始めて十数回目の冬が通り過ぎようとしていた。良輔は既に首都圏にある私立の全寮制の高校に進学が決まっていた。助の噂は巷でも杳として聞こえなくなっていた。

急に空白の中に放りだされた現在の環境を埋めるために再び良輔はメインスイーパーに向かいあった。既に彼のXPにはインターネットが繋がっており、そんなものよりも面白い遊びが無数にあるにも関わらず、どうしても彼はその地雷原を見つめることをやめられなかった。彼には今の学校の友人がおり、実は思いを寄せている女性もいた。近隣の学校に進学するはずの彼らにも別れを告げなくてはならなかった。凡庸だが、自分の思いも伝えなければならなかった。しかしそもそも彼はもっと早くに別れを告げなくてはならなかったはずの相手に、別れを切り出すことが出来ていなかった。そう気付いていた。既に時間は流れ去っていたが、この搭載されたメインスイーパーは不滅だった。それは不動で無為で完璧だった。余った時間は日々それと向かい合って、しばしば一人で爆弾が破裂する音を耳元で聞いた。それは記憶の木霊だったのかもしれない。ちゅど一んという擬音を互いに表し合って笑った、あのどうしようもない古馴染みの記憶。

出会いは全く不意に起こった。隣町の端というよりも果てにあると言った方が正しいようなホームセンターで、良輔が引っ越し用の雑多な品物を揃えようとしていた時だ。無数の、違った機能を持つと言われているがほとんど同じ形にしか見えない、トイレ用クリーナーの一面の白い画面から適当に何かを買い物カゴの中に入れ、レジカウンターに小金を投げうって出てきた彼の目の前にそれは起こった。旧世代のパソコンを中古で販売している、殆ど古具屋と変わらない電気店があったことに不意に気付いた。今までは興味さえ持たなかったのだ。驚くほど安く売られていたその機械類の画面の前に、一人の薄汚れた人間が立っていた。良輔は眼を凝らし、その疑いを本物であるという確信に変えるべく、しばらく声をかけるのを耐えた。だが結局は確信に変わる前に彼は声をかけてしまった。それは確信には変わらず、一足飛んで断定に変わってしまったからだろう。息を吸い、「助だろ、お前」と良輔は言った。

その男は振り向いた。その顔は赤らんで数メートル離れても酒気が香ったが紛れもなく助であるのが、良輔には分かった。しばらくただ彼の顔はディスプレイの青い明かりの上に浮かんでいたが、口元が不意に動くと、良輔なのか、と彼は言った。良輔は頷いた。そして言った。「お前、腕が落ちただろ。酒なんか飲むからだよ」画面には紛れもないあの懐かしく普遍の不変である地雷原が海の中のブイのように浮かんでいた。メインスイーパーだ。

ちょっと貸してくれよ、と助に良輔は言った。

助は何も言わずに一步引いた。その時、彼の手にはまだ半分蓋が開きっぱなしの毒々しいラベルのついたカップ酒が握られていることに良輔は気付いた。「お前は身長が伸びるべきじゃなかったな」と彼は言った。ここでは誰でもすぐに酒を気にせず売ってしまうから意味はないが、そんな一言をせめて彼に言っておきたかった。パソコンの四角形の画面の前に立つと、良輔は指先に最大の注意を払った。白いカーソルは画面のくす

んだ藍色の上を動いて、灰色の地雷原の上に辿り付く。そしてスタートの文字をクリックする。両目を凝らして指先が何もない空間をつついて陽の下に晒し、1や2や3という数字の混じり合った次なる舞台を提示した。この数字に臆せず次の空間を切り開かななくてはいけない。新しい次の空間を。そこにはどんなに推論を働かせようとも地雷を踏んでしまわない可能性がないとはいえないのだ。途中まで彼はほとんど僅かな口スも無しに猛然と対人地雷の推定をして、次の安全圏と思われる箇所を作り上げていった。助の方を見る余裕はなかったが、もうどんな表情をしているか気にもならなかった。今や二人を結び付けるものはこの地雷原の上にしか存在しない。数字、数字、そして旗。新しい旗が地雷の上に予期されたかのように立つ。その旗はやがて来るこの戦場にも平和が満ちることを意味している。この単純なゲームは悲劇を玩んでいるのではなかった。きっと幸福を約束するものでもあるはずだ。

良輔の肩が動かなくなった。「終わった」と言ったのは助だった。

「ごめんな」と良輔は言った。「まだお前には勝てないよ」

そこに出現した数字は助のかつて記録した数字に及んでいなかった。まだ僅かに助の方が上回っていた。「そうか。ありがとう」と助は言った。「また次があるだろ」

「ああ、また次がある」と良輔は言った。それは本当だった。いつになるかはまだ分からないが確かに本当だった。「またやろうよ」

突然、助は口ごもってしまった。得体の知れない沈黙が二人の間に落ちた。その沈黙は今までに見たことのない、奇怪に悪魔めいた何かを持つ時間だった。気味の悪いクリーム色の床が良輔と助の間に横たわっている。その時間のせいで思わず良輔は先ほどの黙示録的な質問を彼に尋ねてしまいそうになっていた。しかし言ってしまった瞬間にこの絆は崩壊してしまうだろう。すべての関節は外れ、かつて伽藍をなしていた無意味なただの石材の海へ、世界は音を立てて変わる。彼は質問を変えた。どうしようもない質問、どうでもいいかもしれない質問、けれど今まで気になっていたような質問、長い沈黙を折ってあたかも答えであるかのように鳴る暖炉の薪に似た質問を、彼は代わりにその場に与えたのだ。

「あのさあ」と良輔は言った。「どうしてお前の名前は、そんな風に変わっているんだ？」

助は微笑んだ。この名前は母親が危うく自分を産もうとした際、危険を迎えたがどうか持ち直したことを記念して付けられたのだ、と彼は知っていた。でも彼にはこの由来を教えたくなかった。この名前の意味も、それに対する無数の相互の裏切りも、彼は今後決して知らなくていい。絶対に。「知らないさ」

「いや、僕は知っているよ。きっと聖書の言葉だ」と良輔は言った。「そう、『天は自らを助くる者を助く』というんだ」良輔は笑った。不出来な冗談だった。それにつられて助も笑い、結局は二人とも笑った。互いの肩を叩いて笑うと、二人の手はくっきりと明るさと暗さを代表するように映えたが、もうどちらの手なのかさえどうだって良かった。しばらく笑った。

ちなみに実はこの言葉は聖書の言葉ではない。良輔の観点から言えば聖なる言葉でもなく、本当は救世主の言葉でもなかった。

だがそれは確かにこれから後に起こることだった。やがて助はこの意味を自らの身をもって確かめることになるだろう。未来はその言葉のままに起こるだろう。真実はこの時、確かに黄昏から翅を広げると地雷原に立つ旗から高く空へ飛び立っていったのだ。

良輔は旅立ち、もう長く戻らない。助も少ししてから、旅立って、同じように、もう長く戻らない。

考えてみればただそれだけのことにすぎなかった。

個人的な機械

<http://p.booklog.jp/book/84841>

著者：御殻方式

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/okarahoushiki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/84841>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/84841>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ